

穂高岳滝谷 出合から第4尾根の登攀記録 その1

記・疋田 吉継

概要

行先：穂高・滝谷第4尾根

目的：無積雪期のアルパインクライミングを計画し登攀してリーダーとしての到達度を確認する

行程：大阪→新穂高温泉→滝谷（雄滝、滑滝～C 沢右股）→スノーコル→滝谷第4尾根→北穂高南
陵テント場→涸沢→上高地→新穂高温泉→大阪

日程：2017年8月10日夜～14日

参加者：疋田吉継（CL）、井上好司、松田明博（副校長）

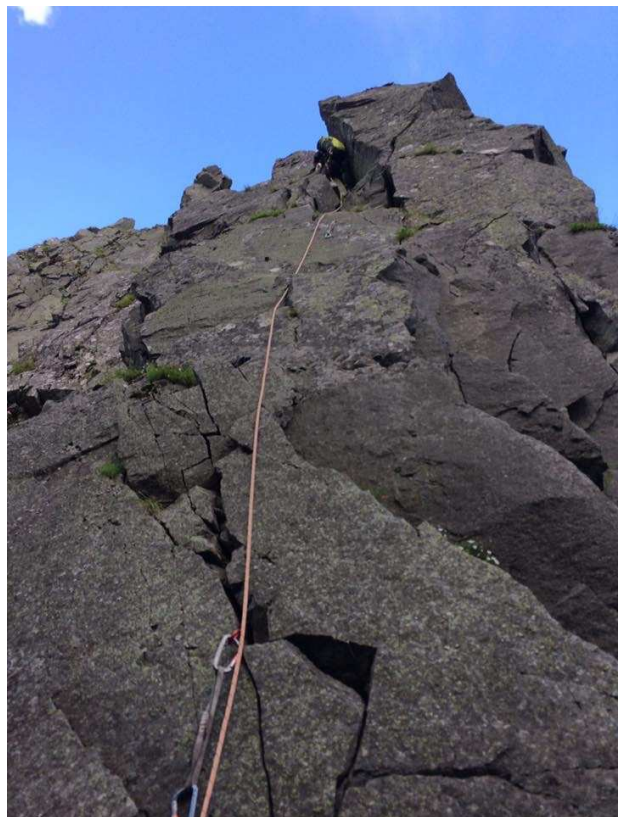
初めに

この夏のリーダー検定山行で穂高の滝谷に行くことになった時、私は単純に興奮し、同時にものすごく緊張した。「タキタニ」と聞くだけで体の芯がブルッと震えてしまう。

40年以上前、高校の山岳部にいた私は、山に結構ハマっていた。といっても高校生、自分たちだけで北アルプスの岩場の登攀など行けず、もっぱら本などを読んで、行ったつもりになっていた。気持ちだけはいっばしのクライマー。そして、まだ見ぬアルプスの岩場に思いを馳せていた。そのなかでも滝谷は別格だった。なんだか僕らが近づけない、恐ろしいところというイメージがあった。当時、日本の登山メーカーが販売していたヘルメットに「滝谷」という名前がついた商品があった。確か、ヘルメットの前に小さなひさしみたいのがついたやつだったと記憶している。そのヘルメットを見ただけで、「滝谷というところは厳しいところで、一流のクライマーしか行けないところなんだろうなあ」と勝手に思い込んでいた。その後、「鳥も通わぬ滝谷」とかいう言葉を聞くにつれ、「滝谷なんて普通の人間は行けないとこ」と、一人で勝手に決めつけていた。

さて、社会人になり、40代後半から再び山を始めたが、まさか自分が、あの、鳥も通わぬ滝谷に登攀に行くなんぞとは思ってもよらなかった。それだけに、今回の山行は、自分の中で「僕もついに滝谷へ行くんや」と格別の思いがあった。しかし一方で、「こんな技術も体力もないおっさんが、果たしてほんとうに行けるのか」と、不安一杯でもあった。出発が近づくにつれ、緊張の度合いが増し、夜中に変な夢をよく見た。

心配だった天気も、8月の前半があまりよくなく、盆のころも低気圧が日本列島に居座っていてあまり期待できない。かろうじて13日のみが高気圧の影響で晴れるかなという感じだった。



8月13日の滝谷は青空だった。

予習も十分にせず行ったので、取り付きまでのアプローチは大したことないとタカをくくっていた。今振り返ると、とんでもない思い違いだった。

滝谷の第四尾根を登攀する場合、現在では、涸沢経由で北穂高南稜テント場などを早朝に出発し、稜線（北穂のコル）からC沢を下降して取り付き点（スノーコル）に至り、登攀するというのが一般的で、今回の我々のように、滝谷を下流の出会い（避難小屋）から詰めて取り付きまで行くというケースは極めて少ないという。

実際、今回の登山でも、お盆の混雑期にもかかわらず、滝谷の沢を登っている人とは誰一人会わなかったし、取り付きのスノーコルまで人の踏み跡はなかった。少なくとも過去一週間ほどは、避難小屋から滝谷を詰めたパーティーはいなかったようだ。

その滝谷。初日にピバークした雄滝上部まで、巨岩のガレ場と雪渓のオンパレード。しかもピバーク地点への雄滝の登りは岩と泥と砂利と木が混じった、いやらしい登り。2日目の、取り付きのスノーコルまでの登りも浮石だらけのガレ場と雪渓、滝を高巻く登りと、神経を使うところばかり。2日間にわたって長大な沢登りをこなした後に岩壁登攀をするという感じで、アルパインクライミングの醍醐味、楽しさ、それにしんどさを十分に味わった。某ネットに、「スノーコルまでの長大なルートは、日本の無積雪アルパインルートの中でも最も労力を要するコースといってもいい」と書かれていたが、まさしく実感。取り付きのスノーコルに着いた時点で、今回の山行の4分の3が終わった感じがして、明日から登攀の本番なのに、なんだか気持ちがホッとしたことを覚えている。

当たり前のことながら、今回の山行は、松田副校長の存在がなければ成しえなかったと思う。松田さんには、ほんとうに色々とお迷惑をおかけし、お世話になりました。山行中もやさしく？指導して下さい。よくもこんな頼りない人間に同行して下さったことか。心より感謝いたします。残念ながら中川和道校長はヒマラヤ遠征で参加されなかったが、山行中、しんどい時に何度か「しっかりせい。がんばれ」という中川校長の激励の声が聞こえてきた。ありがとうございます。

行動記録

8月10日（晴）

22:45（33℃）大阪駅西側、モンベル前に集合。疋田の車にて出発。

途中、名神黒丸パーキングで休憩。東海北陸道に入ったところより、ガソリンが3分の1を切りかけたのでGASを入れることにするが、どのサービスエリアにGASスタンドがあるのかを確認できないため、少々焦る。01:00過ぎ、「いったん降りて、下のGASスタンドで入れよ」という松田副校長の判断で、途中のインター（郡上八幡だと思う）で下車。松田さんのカンが見事に当たりインターを降りてすぐのところにGASスタンドを発見し、給油。助かった。副校長に感謝。これで安心して走れる。夜間走行は、前もってGASは満タンにすべきだ。

8月11日（晴）

04:00 新穂高から7km手前の通行止め地点に到着（がけ崩れの復旧工事のために午後8時半～午前5時まで通行止め）。手前の広場で5:00まで仮眠。私はなかなか寝付かれず、15分ほどうつらうつらしてたら、「車が動き出したぞ。行こっ」の松田さんの声で目が覚め、仕方なしに出発。結局、この日の睡眠時間は、この15分間だけ。「全然寝てないのに歩けるやろか」と不安がよぎるが、今さらしゃーないわ。

05:15 新穂高着。新穂高登山指導センター前の、P3 県営公共駐車場が開くのを待ち、並ぶ。

05:30 P3 県営公共駐車場に入場。登山の準備をする。

06:15 準備完了。出発前に私がトイレに行くと、すでに20人ほどの長蛇の列。20分以上待って、やっとトイレに。待ちくたびれた松田さんは道で寝てしまった。井上さんはロープウェイの駅の

トイレが開いていないか見に行ってくれたが、駅は閉まっていて、トイレは使えない。ぬかったなあ。到着してすぐに行っとくべきだった。

06:50 (22℃) ようやく出発。しばらく舗装路を歩く。途中から地道の登山道に変わる。やや蒸し暑い。

07:45 穂高平小屋着。汗びっしょり。しかしこの小屋はなんだかしょぼい。標高が低いせいか、山の中のオアシス的なところがないなあ。ここで10分休憩。

07:55 出発。未舗装の林道を歩く。単調な道だが、時おり谷を渡る風が涼しい。

08:45 (19℃) 白出沢出会い。視界が急に開ける。水場がある。冷たい水で喉を潤す。美味しい。10人ほどの別パーティーも「水が冷たい。美味しい」とワイワイ言っている。10分ほど休憩して出発。

森林の中の、苔むした岩がごつごつと続く道を歩く。小さくアップダウンを繰り返しながら約1時間20分ほど歩くと、大きな沢に出た。滝谷の出会いだ。

10:10 (18℃) 滝谷避難小屋着。出会いはかなり広く、大きな岩がゴロゴロとしている。ここで20分の大休止。行動食などを摂る。

正面に雄滝が見える。ここからは、はるか稜線までは見えないが、見上げると、やはり得もいぬ迫力が押し寄せてくる。さすがタキタニだ。槍ヶ岳方面に向かう人たちと別れ、我々は一路、滝谷の上部を目指す。

しばらくガレ場の道が続く。

雄滝の約100m手前から雪渓が現れる。雪の厚さの薄い、頼りない雪渓なので、上を歩くのは危険と判断。雪渓の下をくぐって歩くことにする。

一人ずつ足早に通過。先頭の松田さんが通り過ぎた後、雪渓の切れ目の上からこぶし大の石が「ガラーン」と落ちてきた。「おー、怖わ〜」。ごくりと唾のみ込む。上を見つつ急いで通り抜ける。

全員が雪渓を潜り抜け、雄滝の右岸（雄滝と雌滝の間の尾根）の下部に出る。

通常は、もう少し雄滝側に回り込んで、やや階段状の岩場を登って雄滝上部に抜け出るということだが、あいにく雪渓が邪魔して滝側に回り込めない。仕方ないので雪渓が切れた隙間を狙って右岸に登ることにする。

12:10 松田さんがリードで登るが、ホールドもスタンスも乏しく、やや苦戦気味。1ピッチ切り、疋田、井上さんと続く。岩らしいのは取り付きだけ。上部に行くほど草付き、泥付きの滑りやすい壁で、ズルズルと滑り、登るのに難儀する。さらに上部へはロープを使わず木登りで登る。ヒーヒー言いながら、やっと、小さな空き地に出た。2×3mぐらিদらうか、それでもほぼ平坦の空き地はうれしい。とりあえず、ここでピバークすることにした。本日はこれ以上登らなくていいと思うと、なんだか嬉しくなってくる。ピバーク地点の手前で、昨年、中川校長が登った際の遺物を発見。誤って触れそうになった。こんなところで中川校長の分身に出会うとは。

14:40 ピバークの準備をし、少し休憩してから、全員で水場まで水を汲みに行くことにしたが、これがまた危ない。

ピバーク地点から水場までは約30mほどなのだが、急斜面の崖をトラバースしなければならず、



初日は滝谷雄滝左上のピバークサイトへ

危険このうえない。滑って勢いがつけば、滝の落ち口まで真っ逆さまだ。しかもこのトラバース道が草付きで滑りやすい。ビビりながらゆっくりと確実に歩くが、それでも何度か軽く滑る。くわばらくわばら。

今晚の料理は、松田副校長の豚汁風の鍋。生の野菜と豚肉がうれしいし、旨い。前夜、ほとんど眠れてないので、食事をとったらバタンキュー。みんなぐっすりと眠りについた。

8月12日

04:00 起床。

06:00 (10℃) 出発。昨日、水を汲みに行った、例の恐怖のトラバース道に行く。やはり気持ちが悪い。朝一番の体がまだ重い時点でのヤバイ道。緊張で眠気がいっぺんに覚める。ここは本当に要注意である。

06:30 水場をさらにトラバースし、雄滝の上部に出る。沢(幅約10m)を右岸から左岸に渡渉する。かなりの激流だ。ここでひっくり返りでもしたら、滝に流され、一気に滝壺だ。「なんで朝からこんなところ歩くねん」とぼやきながらも、緊張に身体が武者震いする。

渡りやすいところを狙って、岩伝いに一人ずつ飛ぶが、どうしても膝から下はザブンとずぶ濡れになる。渡り切った岩の上で、全員がボトボトの靴下を絞ってひと時休憩。やはりウールの靴下は、濡れても暖かいからいい。

しばらくガレ場を歩くと、再び雪渓に出る。アイゼンをはめる。実は4本爪の軽アイゼンをはめるのは初めてで、家で予習しなかったため、うまくはめられない。松田さんに怒られ、笑われながらも、なんとか装着。でも4本は歩きにくい。つま先と踵が滑り気味でなんだか怖いのだ。こんな思いをするなら、少々重くても6本爪のアイゼンを持ってきたらよかったと後悔する。

この頼りないアイゼンで、雪渓の上を歩いたり、雪渓の下をトンネルでくぐったりして、滑滝の中間部に出た。

07:50 滑滝登攀の取り付き着。アイゼンはずして、登攀の準備。アルパインは忙しいのだ。

08:30 (11℃) ナメリ滝登攀開始。

滑滝右岸に登攀する。文字通りナメの滝だが、ここも落ちて滑ったらズルズルと止まらなさそう。緊張する。

トップは松田さん。疋田、井上と続く。登り始めから、スタンス、ホールドがない。松田さんが、右上約1mほどの岩にシュリングを輪にして投げ、岩に引っ掛け、それをホールドとスタンスにして登って行ったのを見ていたので、真似をして、シュリングを輪投げにするが、何度やっても岩になかなか掛からない。まるで下手くそなカーボウイ。そうこうしているうち、上からロープはグイグイ引っ張られるし、焦る。20回以上試みるがダメ。「このままずっとこんなことをして、一生登られへんのとちゃうか」と思いかけた頃、やっと岩に引っ掛かった。ホッ。

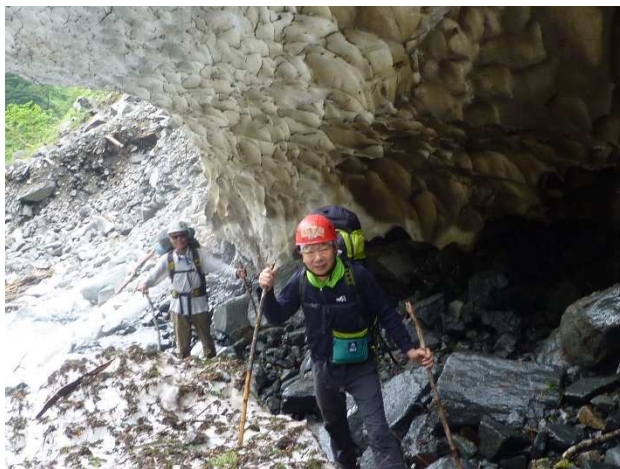
濡れた岩は滑るのではないかと、滝から離れた左側の乾いた岩の方を登ろうとする。上から松田さんが「右や、右。もっと滝の方へ寄せ」と叱咤の声。確かに右側の滝寄りの方が登りやすし、濡れても必ず滑るとは限らないのだ。

結局、滑滝は3ピッチの登攀で滝上まで出た。その3ピッチ目。私がセカンドで登っているとき、ランニングピレイを外しに左側に身体を動かしたとき、50cm×20cm×20cmほどの巨大な浮石にほんの少し触れた。するとその浮石がグラッと傾き、落ちかけた。足でその石を押さえつけ、なんとか落石しないように踏ん張ったが、このままだと身動きが取れないので、下で待機している井上さんに向かって、「大きな落石、落ちますよ」と何度かコールして、足を離れた。落石の落下場所と井上さんの待機場所がかなり離れていたため、井上さんに当たる心配はなかったが、それでも巨大な落石が落ちる音には正直ビビった。あれだけの大きな音がした落石は初めてだった

(その後の滝谷の登攀で何度も経験して慣れたが)。地響きがして滝の音も負けるぐらいだった。さすが本チャンは落石の規模や音まで違う。

10:30 滑滝の上部に着く。再びガレ場歩き。またすぐに雪渓が出てきた。

崩れなさそうな雪渓は雪の上を歩くが、崩れそうな雪渓も数か所あり、そういうところは雪渓の下をトンネルくぐりで通過。3人が一斉に急ぎ足で通過する。大きな音を立てず、ぐずぐずせず、「頼むから、崩れんとってくれよ」と祈りながら、一気に通り抜ける。ハラハラ、ドキドキの連続だ。記憶のいい松田さんによると、今回の山行では、計6か所の雪渓の下をくぐったという。



この後、ひたすらC沢を詰めていく。F沢やA沢、B沢やD沢など、いくつかの沢の出会いを過ぎる。とにかくガレ場の連続だ。周囲を見渡すと、だんだんと荒涼とした光景が増し、まるで石の墓場を見ているようだ。巨人が気ままに岩をぶちまけたのではないかと思うほどだ。

穂高の稜線が迫ってくる。その稜線に向かって、谷筋がより急峻さを増す。迫力ある光景だ。岩と石の世界。申し訳

今年の滝谷は雪が多く、何度も雪渓の下を歩く。

程度に木が生えている。殺伐として、落ち着かず、楽しくない光景だ。確かに「鳥も通わぬ」というのが実感できる。そんなことを考えているとき、鳥が上空をかすめていった。僕も鳥になりたい。

11:35 C沢の大岩に着。B沢との出会いを過ぎ、しばらく行くと、やや開けた地点に出た。涸れ沢の真ん中に置4畳半ほどの大きな岩が鎮座している。ここでルートを確認するため、15分ほど休憩。左右に尾根の先端が見えている。右が第4尾根、左が第2尾根だ。

11:50 (12℃) 大岩出発。C沢から第4尾根へのルートを探しながら、C沢のガレ場を進む。途中でアイゼンをはずす。

13:50 左側に第3尾根の末端が確認できた。左側に第3尾根、右側に第4尾根。沢の左俣と右俣の出会いだ。

このまま右俣の雪渓に上がり、雪渓をまっすぐに歩いていけば、スノーコルの下部に着くはずだが、どうも雪渓の状態が良くない。雪の厚さが薄そうで、歩くのが危険そう。しかも雪渓から第四尾根のガレ場に取りつくところの雪がかなり薄い。右側の第四尾根の下部のガレ場をへつって(トラバース)いくのも困難そうなので、松田さんの判断で、左側の第3尾根のガレ場をへつり(トラバース)気味に登って行くことにした。ここでアイゼンをはずした。

しかし、この第3尾根のガレ場は浮石の巣窟で、まともに歩くのができないぐらいの悪路だった。だが、ともかく、もう後戻りはできない状況だったので、ひたすら進む。落ちる心配はなかったが、とにかく浮石だらけで歩きにくい。ここでかなり時間を食ってしまった。「しまったなあ。雪渓を歩いたらよかったなあ。ルートファインディングのミスや」。松田さんが何度もつぶやく。

右側の第4尾根を見上げると、スノーコルらしき地点が確認できた。第3尾根を右に下る。結構スリリングだ。ちょっとビビる。しかしこれを越したら、もう少しでスノーコルだ。もう一息。頑張ろう。第3尾根を降り、雪渓とガレ場を横切る。やっと第4尾根に取り付く。人の踏み後がある。この2日間、人の踏み後など見なかったのに、久しぶりの足跡だ。スノーコルへの道だ。

懐かしさと嬉しさで足跡にキッスしたくなった。最後の踏ん張り。目標が見えたとたんにドッと疲れが出た。しんどい。頑張れ。ガレ場から第4尾根を200mほど登って、やっとスノーコルに到着した。ヤッター。ほっ。

16:25 スノーコル到着。早速、テントを張る。手早く食事を摂り。18:00に就寝した。

その夜はペルセウス流星群の見える日だった。外へ用を足しに出かける時に夜空を見上げる。満天の星が夜空を埋め尽くしていた。都会では絶対に見られない星空だ。キラキラとまぶしいくらいだ。しばらく呆然として夜空に目が吸い付く。

残念ながらペルセウス流星群は見られなかった。松田さんと中川校長が昨年、この流星群を見て、「金(カネ)、金、金」と必死に願い事をかけたのにもかかわらず、お二人とも未だに願い事が成就してないということなので、流星群への願い事もあんまり期待できそうにない。まあ、そんなもんや。それよりも、この星ならば、明日の登攀はいい天気恵まれそうだ。好天を期待しながら再び眠りについた。

8月13日

4:00 (晴) (11°C) 起床。朝食を摂り。急いでテントを撤収する。やや疲れているが、これからが本番なので、気を入れなおして、登攀の準備をする。

05:55 1P (30m) (I~III級) L 疋田—井上 (ビレイ) —松田

まずは、私(疋田)がリードで登る。最初だけ3級程度の岩があるが、そこを越えるとハイマツの続く1~2級の尾根上の岩稜帯。コンテで登ってもいいが、ウォーミングアップのためザイルを伸ばす。朝イチなので身体が重い。息もゼーゼーいう。こんな調子で最後まで行けるの？

06:15 2P (50m)、(I~II級) L 井上—疋田 (ビレイ) —松田

2Pは井上がリード。やはり1~2級のハイマツが混ざる岩稜帯を軽快に進む。

06:30、3P (40m)、(III級) L 松田—井上 (ビレイ) —疋田

ところどころ草の付いた、浮石の多い、不安定なガレ場。しかし、昨日までの浮石に比べたら大したことない。浮石歩きに慣れてきたのか？Aカンテ下のリッジまで登る。

06:55 4P (30m)、(III級) L 疋田—井上 (ビレイ) —松田

Aの字にスパッと左右が切れ落ちたようなAカンテ。カンテの右側を登る。見た目は少々難しそうだが、ホールドはそこそこある。ただし、はがれやすそうな岩も多いので、岩を叩き、確認しながら登る。ホールドに力をあまりかけず慎重に行く。ここの岩はうかつに信用できない。それにしても本チャンは、やはり緊張の連続である。

07:50 5P (35m)、(III級~IV級-) L 井上—疋田 (ビレイ) —松田

両側がカナを削ったように切れたBカンテ。井上さんは松田さんの指導で、カンテのとんがり両手で持ちながら、左側を両足でカニのように横歩きして登る。私も見よう見まね必死にしがみつきながら登る。ホールドも少なく、岩のフリクションも乏しく、登り始めは特に難しいと感じたが、なんとかクリア。それにしても高度感がすごい。素晴らしい景色だ。

Bカンテを登りきると、平らなリッジが続く。その向こうに、傾斜のきついCカンテが見える。リッジでピッチを切る。

10:00 6P (30m)、(III級~IV級-) L 疋田—井上 (ビレイ) —松田 Bカンテよりさらに傾斜のきついCカンテ。すくっと立った垂直のカンテは見た目も厳しく、ツルツとしていて、ホールドやスタンスも乏しい。

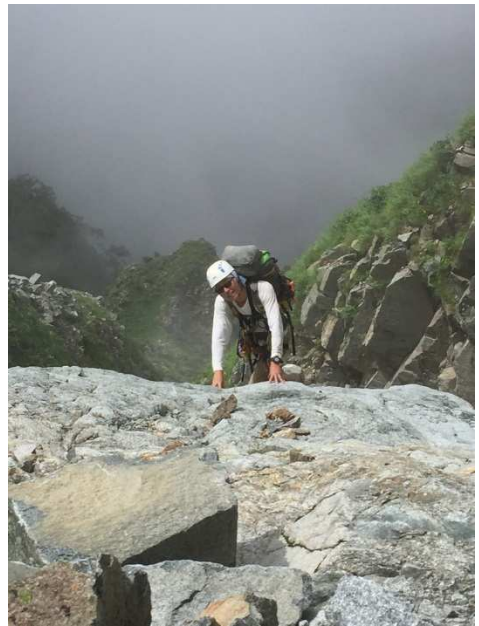
後続のパーティーが近づいてきたので少々焦ってしまう。細かいスタンスとホールドを拾いながら、フリクションを目いっぱい効かせて、なんとかよじ登る。凹基部のテラスでピッチを切る。

11:00 7P (25m)、(III級) L 井上—疋田 (ビレイ) —松田

頭上にそびえる大ピナクルに向かって、凹のやや左側を登る。浮石だらけで、岩がもろい。岩を落とさないよう、ホールドとスタンスを叩いて確認し、慎重に登る。いやな感じだ。井上さんが足を置いた草付きの泥土が、浮石とともに落下。少し滑落したが、すぐに停止。ヒヤッと緊張が走る。無事でよかった。

13:00 8P (50m)、(Ⅲ～Ⅳ級一) L 疋田—松田 (ビレイ) —井上

大ピナクルの左下から右にトラバースして、ピナクルの右側下部まで登るはずだったが、私がルートの間違えて、大ピナクルの科尔を乗っ越してしまった。ピナクル下部にピンを確認できなかったため、何を思ったのか科尔から下に下降してしまった。またちょうどそこにピンが3つあったので、支点と勘違いしてしまった(猛省)。ロープが科尔をまたいで下に伸びたものだから、当然動かない。業を煮やした松田さんが、ロープをフィックスするように命じ、ブルーシックでピナクル下部まで登ってくる。その後、疋田、井上さんが、松田さんのいるピナクル下部へ。貴重な時間を食ってしまった。本当に申し訳ないことをした。



乾いた岩は気持ちがいい

大ピナクル下部から、疋田に代わって松田さんがリード。ツルムの裏側の肩まで登る。

登り始めのフェースは、一見難しそうだが、細かいホールドやスタンスが結構ある。しかも岩が固いので登りやすい。ただし、型の直下の垂壁は少し難しい。Ⅳ級一か。

14:30、(懸垂下降)

ツルムの科尔まで懸垂で下る。懸垂のロープが当たる岩角に大きな岩が浮いていて危険だった。懸垂は初めのところが少しハングになっていて、やや空中懸垂気味になっているので、慎重に降りる。

15:30 9P (25m)、(Ⅳ級) L 松田—井上 (ビレイ) —疋田

垂直に登る。最後はチムニー状の登り。これがしんどかった。ホールドもスタンスもないように感じた。松田さんの「チムニーの中にホールドがあるやろ」との声で、手を差し込むと、かすかにあった。それを手掛かりに力任せによじ登る。ゼーゼー、ヒーヒー、息が切れまくりの登りだった。井上さんの登りを待っている間、ふと、「そういえば朝から何も食べてない」と思い出した。行動食の柿ピーを口に入れた。うまいはずなのに、疲れていたせいか、それほどおいしく感じなかった。口の中がザラザラだ。緊張のためか、不思議と腹は減らない。しかし何か食べなければ身体が持たない。

16:30 10P (25m) (Ⅲ級) L 松田—井上 (ビレイ) —疋田

この後、松田さんが、私や井上さんの疲労度と時間的なことを鑑み、最後のDカンテを避けるルートを選択。右の壁をトラバースし、回り込んだ後にスラブに登る。この辺りも浮石だらで、足場が悪く嫌なところだ。ほぼ最終地点なので緊張しながら慎重に登る。

11P (15m) 松田—井上 (ビレイ) —疋田 最後は15mのガレ場。ここも一歩一歩確実に足を置き、

慎重に行く。

18:10 最終支点到全員が到着。クライミングシューズからアプローチシューズに履き替え、登攀用

具を仕舞う。ヘッドランプをつけて、フリーで登る。

ところどころ草付きの2級程度の岩場を登っていく。実は私は、この最後の登りが一番怖かった。「クライミングは、ザイルを外した最後の歩きで気が緩み、事故が起こりやすい」との思いが頭の中を駆け巡る。しかもヘッドランプの灯りだけを頼りに歩く。実際、少し危険だなと思うところもあったし、非常に緊張した。

- 19:00 一般縦走路と合流。全員が握手して登攀の無事成功を喜んだ。ほんとうにご苦労様でした。ホッとするが、まだこれから北穂・南陵のテント場まで歩かなければならない。南陵のテント場まで、これが本当に長く感じた。「まだかまだか。早く着いてくれ」と口の中で呟きながら歩く。一般道といえど岩稜帯なので、気は抜けない。
- 21:00 北穂・南陵テント場着。やっと着いた。もうへろへろ。全体力を振り絞って、テントを設営した。全員がテントに転がり込み、シュラフに潜り込み、何も食べずに、即、寝た。約15時間、ほとんど食事も摂らずに、よく歩いたものだ。それにしても人間というのは、本当に疲れた時には、食欲より睡眠欲の方が勝つのだなあ、とつくづく感心した。

8月14日

- 05:00 起床。朝まで熟睡だった。味噌汁を飲んだだけで、06:30 テン場出発。もう怖いところがないと思うだけで気分は楽だし足取りも軽やか。「俺は第4尾根を登ってきたぞ〜〜」と心の中で呟きながら涸沢に下山。涸沢小屋で食ったカレーは抜群にうまかった。ぼちぼちと歩きながら17:00前に上高地バスターミナルへ無事に下山した。

気象

気象予報士のコメント

- 8/11 低気圧の影響で天気は左右されそう。11日は朝方は晴れ間が見られる可能性もあるが、次第にガスが湧きやすくなり、午前中からにわか雨の可能性も。午後は雨が降る確率が高まる。夜は上層の谷や寒気の影響で、遅くなると雨となり、雷を伴って激しく降る恐れ。
- 8/12 上層の谷や寒気の影響で変わりやすい天気。早朝までは晴れるが、日中はガスに覆われ、午前中はにわか雨となる。激しく降る恐れも。午後は小康状態で、夕方になると標高の高い稜線ではガスが取れる所もありそう。
- 8/13 秋田沖に低気圧が停滞し、日本海から湿った北風が入るが、北アルプス南部では影響が小さく、天気は回復し、朝から晴れる見込み。ただ、日中は上層の雲が広がる時間がある。朝夕は弱い雨も。午後になると高いところからガスがわいてきそう。
- 8/14 13日と似通った天候が予想されるが、13日よりガスは湧きやすそう。朝は上層の雲が多い天気、稜線では晴れ間があるが、中腹以下では低い雲が広がりやすい。昼前後は雲が湧き上がり、稜線で霧に包まれる時間も。

実際の天気

- 8/11 今年の夏は、日本列島に湿った空気の流れ込みが続いた。その影響で山間部ではガスに覆われる日が多かった。8/11も、天気図では、山陰沖の低気圧がゆっくりと東進し、弱い前線が停滞するため、山はほぼ一日中ぼんやりとガスに覆われていた。薄いガスだが、滝谷避難小屋あたりから稜線を見上げて、ガスで中腹以上は視界がきかないことが多かった。

この日の天気予報が悪いため、北アルプス方面への山行を中止した知人がいた。しかし、実際はこの日は、日中や夕方には雨も降らず、雄滝までは悪い天候だとは感じなかった。しかし夜中、ピバーク中に弱い雨が降り、一時的にだが、やや強く降った。700hPa 高層天気図では等高度線がわずかに北に盛り上がり非常に弱いながらも気圧の峰があったように思える。

8/12 北陸付近に新たな低気圧が発生したため、その影響が心配された。また、上空に寒気が入って

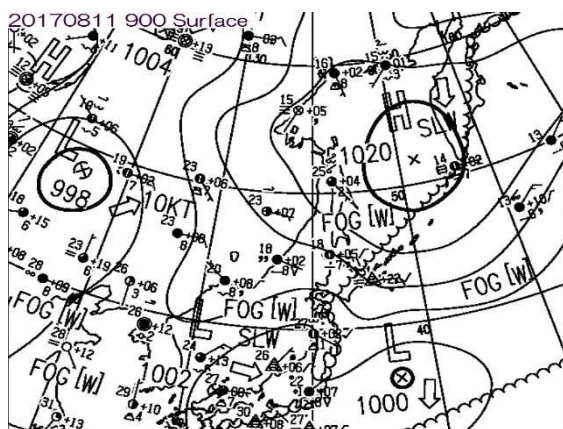
くることで大気の状態が不安定となったが、大きく崩れはしなかった。実際、この日も、薄いガスが湧いていたが、朝から夕方までの行動中に雨も降らず、行動に支障はなかった。地上天気図では絶望的に悪天だが700hPa 高層天気図の等高度線のわずかな北への盛り上がりがあり、非常に弱いながらも気圧の峰があったように思える。地上天気と高層天気が違う好例であろう。

8/13 湿った空気の流れ込みも弱まり、上空に暖気が入り込んできたため、大気も安定し、低気圧の

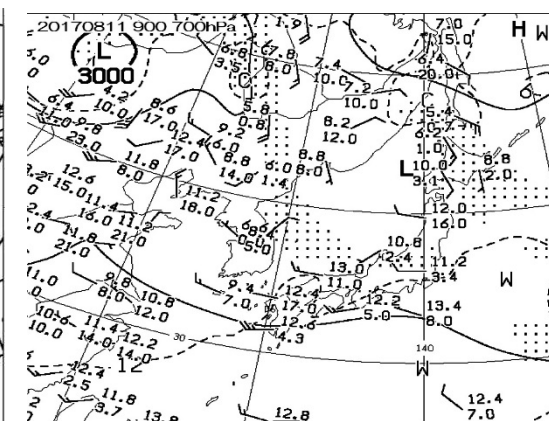
影響もあまり受けず、朝から晴れ間が広がった。夕方になり稜線付近でガスが湧いたが、大したことはなかった。地上天気図高層天気図とも低圧太低圧部の間に入った様子がよく分かる。

8/14 秋田沖に低気圧が停滞し、本州付近を上層の気圧の谷が通過した。朝から晴れの好天で、下山

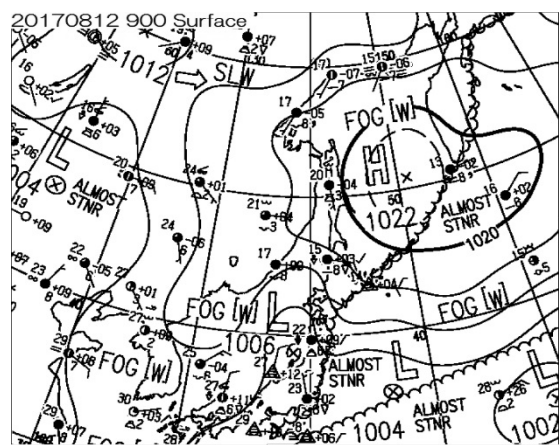
中はガスも出なかった。酒沢や横尾～上高地でも天気はよかった。午後、上高地あたりから穂高などの稜線を見上げると、中腹あたりからガスがかかっていた。



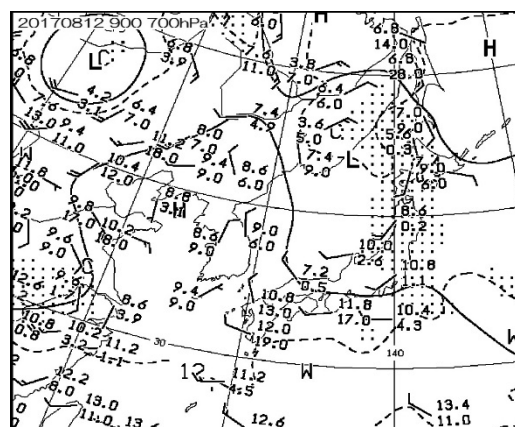
8月11日9時 地上天気図



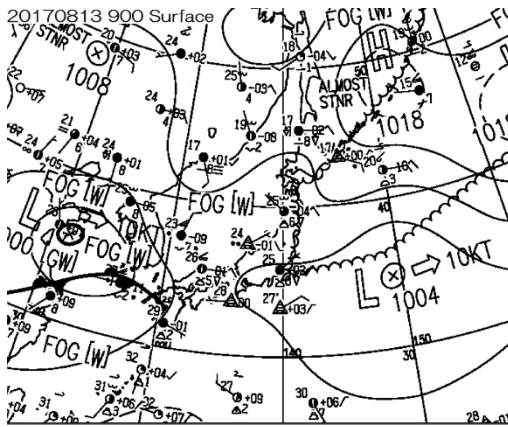
8月11日9時 700hPa 天気図



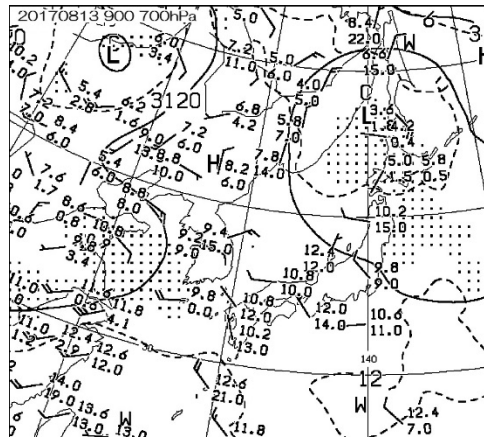
8月12日9時 地上天気図



8月12日9時 700hPa 天気図



8月13日9時 地上天気図



8月13日9時 700hPa 天気図

テクニカルノート

- 新穂高ロープウェイ駅から200mほど下のP3 県営公共駐車場に車を停めたが、ここは朝08:30～16:30の営業で、それ以外の時間は施錠される。つまり16:30以降は車の出入りはできなくなる。やむを得ない事情で上高地に下山する場合もあるので、アカナダ駐車場に停めて、新穂高まではバスを利用する方がいいだろう。
- 今年は雪（雪渓）が多かったのでアイゼンの効果は絶大だった。アイゼンは4本爪でもいいが、できれば6本爪の方がよく効き安心だと思う。4本だと靴の中央の土踏まず付近だけに爪があり、つま先など足の前部を使って踏み込むときに滑りやすい。いずれにしても、現場でバタバタしないよう、出発前に自宅でサイズ調整と装着のテストをすること。
- 雪が多かったので、落ちていた木の枝をストック替わりにして歩いた。ストックがあると便利かなと感じたが、登攀の際に邪魔になるかもしれないので、持参するかどうかは各々のご判断で。
- 今年は、スノーコルから少し下がったC 沢右俣まで雪渓があったので、そこで給水できたが、例年

だとこの辺には雪はなく、涸れ沢で水も流れていないということなので、滑滝など早い時点で水を確保しておく必要があるだろう。

- 虫が多いと予測して、顔に被る防虫ネットや蚊取り線香を持って行ったが、思ったより虫がおらず、結局、使わなかった。
- 残置ピトンも結構抜かれていて、少なく、また残っているピトンも古くて不安定なものが多いので、カムやナッツなどのプロテクションも必要だろう。
- 登山中、落石が手に当たった。落石の多い滝谷のようなところでは、けが防止のため登攀時以外は手袋をした方がいい。
- 第4尾根の登攀に取つくまでは、雪渓のほか、泥壁のようなところや、草付きを登ることも多かったため、アイスバイルは必携。

滝谷第4尾根 上半部 ルート図

2017年8月13日 疋田吉継 井上好司 松田明博

